12月に凱旋公演決定

宝塚宙組トップスター 朝夏まなとさん

ASAKA MANATO

幾重にも重なるスポットライト。2500人を超える大観衆や数十人にのぼる出演者、オーケストラも、すべての視線がたったひとりに集まる。宝塚歌劇団における男役の「トップスター」は、美しさと力強さを合わせ持つ孤高の存在だ。全国から優れた才能を集める宝塚歌劇団の団員約400人のうち、その頂点に立てる人は一握り。わずか5人しかいないトップスターのひとりとして、昨年から宙組を引っ張るのが佐賀市出身の朝夏まなとさんだ。その凱旋公演がいよいよ今年12月6日、佐賀市文化会館大ホールで行われる。現在、名作「エリザベート―愛と死の輪舞―」（7月22日～8月22日、宝塚大劇場）の役作りに励む朝夏さんにインタビューした。（インタビュー：本誌編集長 梅木誠太郎）

博多座公演を終えて

―― 今年5月の、宙組トップスターに就任後初となる博多座での九州凱旋公演「王家に捧ぐ歌」は、九州らしい熱い盛り上がりを見せていた。

私たちが行く前に九州での震災がありました。いろんな思いを持っての公演でしたが、九州のみなさんに温かく迎えてもらって、結果として、すごく良い形で終わることができて本当に良かったと思います。千秋楽の挨拶では、観客のみなさんから、すごく温かい拍手をいただきました。

「エリザベート」への意気込み

―― 現在はハプスブルグ家が支配するウィーンが舞台の名作「エリザベート」の稽古中。歌劇団初演から20周年というメモリアルイヤーに上演する思いは？

最下級生のときに、春野寿美礼さんの花組（2002年）の「エリザベート」に出演させて頂き、市民や彫像などいろんな役を演じていました。いつか、メインキャストといわれる役をどれかできたら嬉しいなと漠然と思っていましたので、再演のお話を伺った時は驚きと同時に喜びや責任を感じました。

―― 「黄泉の皇帝トート」の役作りで難しいところは？

難しいことだらけです！ トートは一色ではなく、場面によって変化する。「死」であるという軸は忘れずに、でもすごく外れてみようかな、と試行錯誤をしています。私だけのバランスではなく、周りとの兼ね合いもあります。いつもは私がメインで、それに周りが合わせてくれるというスタイルが多いのですが、今回は、トートもハプスブルグ家を俯瞰して見ている。私自身もみんながどうやっているかを見て作るので、全然作る過程が違って、ある意味とても面白いですが、難しいです！ イメージトレーニングとして普段から黒い服を着たり（笑）、死後の世界に関する本やエリザベートに関する本を読んだりしています。

―― 「エリザベート」という作品の見どころは？

音楽やストーリーに、宝塚のセットや衣装など全てが噛み合っているところではないでしょうか。いらない場面がないし、みなさんが観たいと思うものが全部詰まっている作品だと思います。宝塚版は「愛と死の輪舞」という副題のとおり、特に〝愛〟が描かれていますので、トートとエリザベートという現実世界ではありえない関係に、きっとみなさん惹かれるんでしょうね。トートとフランツに愛されるエリザベートという立場に自分を照らし合わせて、感情移入して、どっちも魅力的だな、と思っていただけるように演じたいです。

佐賀公演で宝塚志望に

―― 宙組トップスター就任後初となる佐賀公演「バレンシアの熱い花」／「HOT EYES!!」が12月6日、佐賀市で開催される。初めて観る人に、宝塚の素晴らしさを教えてほしい。

全てが素晴らしいと思っています。舞台を観て、素直に感動してもらえたら。私たちもそういう舞台を作りたいと思います。

―― 同公演には、佐賀市内の小中学生、数百名が観賞する予定。かつてのご自身の姿と重なる部分は？

私が宝塚歌劇団に入ったきっかけは、中学生の時に月組全国ツアー公演を佐賀市文化会館で観たことです。それまでは宝塚を全然知らなくて、映像でも観たことがありませんでしたが、実際に生で経験して、舞台全部に魅力を感じました。ちょうど、進路を考える時期で、背も高かったので、自分がやりたいのは舞台だ、と思いました。あのとき観ていなかったら、今の仕事はしていないでしょうね。

私自身もそうでしたが、宝塚は普段、縁がない限り、なかなか観れないものです。小中学生のみなさんには、少しでも宝塚に興味を持ってもらえたら嬉しいです。これがきっかけで、その子が宝塚を目指してくれれば、それも良いですし、そうじゃなくても、「感動した」という気持ちを持ってくれれば。芸術に触れるということは、そういうことだと思います。文化会館は小さいときからバレエの発表会で使わせてもらったり、海外のバレエ団の公演を見たりと、いろんな思い出があります。

バルーンの風景浮かぶ

―― 15歳で将来への大きな一歩を踏み出すことを決意されたが、当時、不安や迷いはなかったか。また、家族の思いはどのようなものだったのか。

不安な気持ちよりも、自分がやりたいと思ったことをできる喜びの方が大きかったです。家族や周囲の人たちは心配だったでしょうが（笑）。当時は見えていなかったですね。

―― 音楽学校時代、新人時代、宙組トップスターへの就任など、それぞれのステージで様々なご苦労があったと思うが、その中で最も印象に残っているものはどのようなものか。

全てが濃すぎて…。苦労は当たり前で仕事をしています。乗り超えたときの感動が大きいので、それを目指してやってきました。下級生時代は怖いもの知らずなので、困難と思うことも少なかったのかもしれません。トップの重圧もあると思いますが、それを感じる余裕もありません。大分、慣れて来ましたが、必死にやっています。

―― 宙組の特徴は？

みんなの舞台に対する思いがすごく強くて、必死に努力することは当たり前。その当たり前を、こんなにも清々しくできる。そして舞台を楽しむ。私が目指す、良い舞台を作るということをみんなが分かってやってくれて、支えてくれているという素晴らしい環境だと思います。

―― 大作「エリザベート」の稽古で大変だと思いますが、12月の佐賀凱旋公演の見どころを教えてください。

お芝居は新しく作るので、まだなんとも言えませんが、ショー「HOT EYES!!」は、私の瞳がテーマになっています。歌あり、ダンスありの、すごく楽しいショーなので、宝塚の中で最も平均身長が高い宙組のスケールの大きさを感じて頂けると思います。

―― 「佐賀」というと思い出す風景は？

ウルトラマン オーブ出演中
俳優 青柳尊哉さん

AOYAGI TAKAYA

PROFILE
あおやぎ たかや
1985年2月6日生まれ ／ 佐賀県出身
177cm　68kg
特技／サッカー、水泳、ボクシング、
料理（イタリア料理フルコース、魚料理、デザート）
㈱アルファセレクション所属

特集 佐賀から未来へ

ウルトラマン50周年記念となる「ウルトラマン オーブ」（テレビ東京系午前9時）でダークヒーロー「ジャグラスジャグラー」役として準主役級の活躍をする青柳尊哉（たかや）さん（31）。舞台やテレビ、映画で実力を積み上げ、今年は映画「怒り」（李相日（リサンイル）監督、9月公開予定）や「秘密 THE TOP SECRET」（大友啓史監督、8月公開）といった話題の新作に出演するなど、大きな注目を集める若手俳優だ。青柳さんの思い出深い場所「肥前うどん 翔」で話を聞いた。　（インタビュー：本誌発行人　橋詰 空）

17歳で上京 役者の道へ

――実は、このお店で働いていらっしゃったそうですね。

高校1年生の9月に学校を中退して、それからここで2年半お世話になりました。接客やうどんをこねたり、一通りやりました。まだ旧店舗のころです。そして17歳で東京に出ました。

――役者を目指したきっかけは。

有名になりたかったんです。そのためには東京だろうと。オーディションがあるから出てこないかと、声をかけてくれた事務所があって、そこから家を探して。翔で働かせてもらったおかげで、上京しても全然苦労しなかったです。どのお店でアルバイトしても、ここでの経験がすごく生きました。苦労はしたんだと思いますが、それが当たり前。芝居をやることより、東京で生活することに一生懸命になっていた時期がありました。本末転倒なんですが。それからちょうど1年後に役者の仕事にありつきました。

――どうして役者の道に？

結局、やれることが芝居しかなかったんです。歌やダンスが上手い訳ではなかったので。当時の事務所の方針で学園ドラマのオーディションを受けていました。自分も納得していましたが、俳優の面白さについて考えたこともなかった。何が面白くて俳優やりたいのか、分かっていなかったですね。

PROFILE
あさか まなと／9月15日佐賀市生まれ。身長 172cm。初舞台は 2002 年 4 月「プラハの春」。
好きだった役：「銀河英雄伝説@TAKARAZUKA」のジークフリード・キルヒアイス、「風と共に去りぬ」のスカーレット・オハラ、「翼ある人びと」のヨハネス・ブラームス、「TOP HAT」のジェリー・トラバース
愛称：まぁ、まなと

河川敷でのバルーンの風景を思い出します。小さいときに連れて行ってもらっていた記憶があります。佐賀は空が広い。空港に行く道とかすごく良いじゃないですか。何もなくて。それが良いんですよ！

――佐賀に帰ると必ず行く場所は？

必ず行きたいな、というのは呼子ですね。イカを食べたいですね。佐賀市では城内のレトロ館の雰囲気も良いですね。

――自分が「佐賀人」だな、と思う瞬間は？

こちらでの生活の方が長くなっているので、なかなか実感することはありません。でも友人などから、「電車で佐賀を通ったよ」と言われたりすると、なんで降りなかったの？って思ったりします（笑）。もっと行きたくなるような場所を作ってください！

――最後に佐賀市民のみなさんへメッセージを！

この度、佐賀で公演することができて、とても幸せです。観ず嫌いではなく、佐賀の人が出演するらしいから観にいこっか、ぐらいのノリで観に来てもらっても、嬉しいです。帰りには「宝塚良かったね」と言ってもらえるような作品を作るのが私たちの仕事だと思っています。

朝夏まなとさんのサイン色紙をプレゼント！詳しくはP140をご覧ください

宝塚歌劇宙組公演全国ツアー佐賀公演
MOTE MOTE 読者先行予約　詳しくはP116をご覧ください

――役者の仕事と向き合ったきっかけは？

21歳のときに、宇梶剛士さんのつながりで、渡辺えりさんと同じ舞台に立ったときです。渡辺さんを見て、本当に芝居の鬼っているんだな、と思いました。公演の全てが終わった時に渡辺さんに「あなたほどセリフをしゃべれない俳優を見たことはない」と言われて、真剣に俳優に取り組もうと思いました。それまでは、芝居は誰でもできると思ってたんです。誰でもやっちゃいけない商売なんだ、と考えを改めました。それからは先輩の演技レッスンを受けたり、くすぶっている連中で集まって、一生懸命、芝居について語り合ったり、そういうことを重ねる日々でした。

〝本物〟との出会いで変化

――役者として自信がついたのはいつ頃ですか。

今も自信はないですが（笑）。辞めないという覚悟が決まったのは、28歳のときです。それまでは続けられないかもしれない、と思うこともありました。続けたいことを続けられなくなるかもしれない、と思う怖さが芽生えたのが28歳だったし、どんな形でも辞めないと決心したのもその時でした。TVドラマ「MOZU Season2～幻の翼～」（2014年、TBS・WOWOW）の刑事役でレギュラー出演したときです。監督の羽住英一郎さんとは前作「ダブルフェイス」（2012年、TBS・WOWOW）のオーディションに受かってからの付き合いでした。いろんな監督さんやプロデューサーさんから声をかけてもらうことが増えました。それで今、「ウルトラマンオーブ」という作品に出演することができました。ああ、やっと僕はこの世界で続けていっていいんだ、スタートラインに立ったんだな、と感じています。

――自分自身のどういう変化が、流れをもたらしたと考えていますか？

やっぱり「覚悟」ですね。周りが大丈夫だと思ってくれたんだと思います。僕自身が提示してきた言葉に覚悟ができた。そして人の話を聞くことを意識しました。それまでは相手の言葉の意味をそのまま受け止めていました。でも、その言葉の向こう側に、その人が何を考えているのか、までは考えようと思わなかった。どうして、この人、こういうこと言ってくれるんだろう、とか。本音に触れようと近づこうとしなかった。自分が心を開くことをしなかった。それができるようになったんだと思います。

撮影協力／ 肥前うどん 翔

それまでは芝居を作っていくときに「一枚壁がある」とずっと言われてきました。「本音で言ってないだろう」とよく言われていて、その意味が本当に分からなかった。でも僕らは、その本音をセリフに乗せなくてはいけない商売をしている。それまでの僕は、何を伝えたいのか、あんまり考えていなかったと思います。

――なぜそう考えるようになったんですか？

〝本物〟と仕事をさせてもらう機会が増えたのが大きかったです。〝本物〟に囲まれる場所にいると、僕の表面がすごく薄いんだな、と気づかされる。自分が培ってきたものとか、恥ずかしいものを出さなくてはいけない。それができるようになったから、人と気持ち良くコミュニケーションを取れるようになりました。

以前は顔色を伺うことがすごく多かった。羽住監督や李監督、同世代の役者さんなど、連続ドラマや映画、舞台で出会った人に触れていく中で、それを止めることができた。僕がどう思われているかじゃなくて、自分がどうしたいかを伝える。それに返ってきたことを基本的にちゃんと信じる。それが嫌か、そうじゃないかをシンプルに決めよう。言われて嫌だったら、素直に伝える。なぜ嫌だと思ったか、向こうがちゃんと考えてくれる。それができるようになって初めて、芝居をするにも、東京で生きていくにしても、楽になりました。30歳ちょっと前でした。

最近確信したのは、自問自答は絶対だ、ということ。自分自身が一番分かっているはずなのに、認められない。ずるい自分とか嫌いな自分。そこまで向き合うことがすごく大事だと思います。誰かのせいにしたり、環境のせいにしたり、状況のせいにしたり。でも、もっと突き詰めていくと、自分がそれをしない理由は何か、というところに行き着く。そこまで掘り下げて初めて、人と向き会える。この人、この柔らかい部分をつかれたら嫌だろうな、と思ったら、僕はすごく嫌味な役ができる。でも、その柔らかい部分を大事にしてあげたら、すごく良い人にもなる。今までは、その手前を撫でていたんじゃないかと思います。台本の字面だけで、その内面を見ていなかった。削いでいって削いでいって、玉ねぎがなくなるくらい削いでいったときに、悪さをしていた人にも絶対なにかあるだろうと。そういう本質をついていくことが努力ではないでしょうか。

石をぶつけられる覚悟？

――7月からは「ウルトラマン オーブ」で主役級の重要な役を演じる。

全く笑わない役をやるんですよ。ドラマのレギュラーとしては3作目ですが、メインキャストでは初めてです。主役オーディションを受けて敵役になりました。撮影は中盤まで進んでいます。特撮は「仮面ライダードライブ」や「進撃の巨人」に出演していたので経験があります。スタッフさんから「このへんに怪獣います」とか言われて、本当に怪獣出てきたらどんな表情するかな、と思いながらやっています。ウルトラマンは、子どものころリアルタイムで放送されていなかったので、あまり縁はありませんでした。ただ、現場には、ウルトラマンがとにかく好きな人がたくさんいるので、その人たちを信じれば大丈夫だと思っています。

――敵役ということで子どもたちにどう見られるか気になりませんか？

最初は子どもたちから石をぶつけられればいいと思っていました。それぐらい嫌だな、と思われるようなものを作りたいという気持ちはあります。でも悪い奴だから、石ぶつけちゃえ、となると、子どもの成長にとってはあまり良くないのかな、とも思ってて…。シンプルに嫌な奴だと思ってもらえればいいんですが、自分はそうならない、と思ってもらうのも大事なことかな。でも彼みたいになりたい、と思ってもらうと、僕なりに思いがあってやっているから嬉しいんだけど…。端的に見たら、迷惑で嫌な奴なんで、憧れるべきはヒーローであってほしい。でも、子どもたちには、このお兄ちゃんも悪い奴じゃないんだよ、と感じて欲しいですね（笑）。

――大人のファンに向けては？

生きていると上手く行かないことが多いし、今も嫌なことや難しいことがいっぱいあります。でもジャグラーという役は目的に向かってまっすぐなんですよ。上手くいかなくても、ウルトラマンを超えるために、次の方法を一生懸命考える。こうだ、と決めたことに対して、不屈の意志がある。何度でも向かっていく。それを僕自身も大事にしているので、そこに重なるものを感じてもらえたら嬉しいです。

――最近は特撮ヒーローから人気俳優になった人も多いですが。

バーンと行ければいいなと思いつつ、いい大人ですからね、僕は…。その分、積み上げたものはあるだろうと思っています。自分自身を掘り下げていったら、自ずと結果はついてくると思います。

――最後にこのお店のおすすめメニューを!!

体調によりけりですが、調子が良い時は翔の全てを網羅した「山海うどん」を食べますね。体調があまりすぐれないときは「ワカメそば」。佐賀に帰ってきたときは必ずお店に顔を出します。家族より一緒にいますよ。佐賀での青春のすべてはここにあります。

青柳尊哉さんのサイン色紙＆サイン入り MOTEMOTE さがをプレゼント！
詳しくは P140 をご覧ください

年中行事通じ子どもに「和の心」を

佐賀賛歌 五節供の会代表 中島紀代子さん

年中行事を通じて、日本古来の自然観を子どもたちに伝えたい――。「佐賀賛歌 五節供の会（代表 中島紀代子さん）」が佐賀県内の小中学校で、人日（1月7日）、上巳（3月3日）、端午（5月5日）、七夕（7月7日）、重陽（9月9日）の5節句に合わせ、行事やそれに込められた思いを体験する会を開いている。

「七夕の由来を知っていますか？ 織姫と彦星の話です。織姫さんはみんなのために一生懸命、服を織って、彦星さんはみんなのために一生懸命、牛を飼っていた。神様が結婚させてあげたら、2人とも働かなくなった。そこで神様がとても怒って、天の川の両側に引き離してしまった。2人は反省して、今後はきちんと働きます、と言ったら、1年に1度だけ会えるようになりました。それが7月7日です。そこでこの日の星を見ると願いごとがかなうと言い伝えられてきました。また、昔の暦の7月7日は、今の暦だと8月半ばでお盆に当たります。ご先祖さまをお迎えする行事も合わせて行っていました」と語りかける五節供の会代表の中島紀代子さん。うなづく子どもたち。7月2日、佐賀市の兵庫小学校の体育館には小学1年生134人とその保護者たちが集まり、七夕行事を体験していた。

日本の「共通分母」

五節供の会は、日本伝統の行事ごとにそれに因んだ植物や調度品を飾る「しつらい」を学ぶ会「佐賀賛歌」の活動の一つとして約3年前に発足。これまでに県内の小中高、大学で10回以上、講演している。「日本という場所で生活する人々にとっての『共通分母』は、昔から続く年中行事ではないでしょうか。行事を考えることによって、普段とは違う思考習慣を身につけることができる。小さいときから、ほんのちょっとでも興味を持ってもらえれば、人生をより豊かにすることができるのでは」と中島さんは語る。

中島さんは若い頃、伝統を重んじる実家に反発して〝外国かぶれ〟だったという。お菓子と紅茶好きが高じて、1987年に佐賀市に「夢染館」をオープン。イギリス、インド、スリランカ、中国など紅茶の旅を続けるうちに、「和の心」を知る必要性に気づかされた。広く世界を歩いた上での日本文化への回帰。そんな中島さんが行き着いた日本文化の「共通分母」が「行事」だった。

五色の短冊の意味

体育館では、行事の説明が終わり、五節供の会で用意した七夕飾りをみんなで作り始めていた。『すくい網』は人を『救う』という意味で、みなさんの願いをすくい取ります。『輪つなぎ』は虹の7色です。みんなの夢が消えないように、つなぐという意味が込められています。『野菜』は天の恵、お日様と雨をほどよくくださいという祈りを込めます」と中島さんが説明する。そして、五色の短冊に願いを書き込む。「私たちの周りには目に見えないものがいっぱいあります。春夏秋冬は目に見える？ 東とか西とか南とか北は？ そういう目に見えないものに、わたしたちはいつもいつも守られています。だけど、有難うと感謝せず、当たり前と思ってしまう。それを有難うと捉えるために目に見えないものに色を当てはめるしきたりがありました。心や味にも色を配置しました。五色の短冊の色にはそれぞれ意味があります。青は真心を意味します。赤は感謝、黄は信じる心、白は正しく生きる心、黒は立派に勉強してえらくなろうという心です。短冊に願いごとを書くときに、自分は何になりたいから、今どうしなくてはいけない、と考えて心の色を選ぶと、半分は願いが叶ったも同然です」と中島さんは語りかける。子どもたちは真剣な表情で短冊の色を選ぶ。自分自身をしっかり見つめ直しながら、それぞれに合った色に願いを書いていく。サッカー上達を願う男の子は、自分を信じるという意味で「黄色」の短冊に書いていた。

笹を高々と

子どもたちには1本ずつ笹が用意されていて、作った七夕飾りを、こよりで結びつけていく。「笹は悪いものを払う力があるとともに、天に向かってまっすぐ伸びていきます。できるだけ高いところに立てて、ご先祖さまに願いが叶うように応援してもらいましょう」と中島さん。こどもたちは七夕飾りで賑やかになった笹を高々と掲げて走り回っていた。

最後に中島さんは保護者に向けて「『当たり前』の反対は『有難う』。当たり前になっていることに、いつも気づかずに暮らしてしまう。だから昔の人たちは、有り難かね、という気持ちをいつも心に持っていられるように、こういう行事をやっていたのではないでしょうか」と語りかけた。見えないものへの感謝の気持ち、人間がついつい忘れてしまいがちになる自然への謙虚さを、毎年の「行事」ごとに再確認する。そういう日本人の知恵こそが、この国で幸せに生活する上で、一番素朴で大切なことではないだろうか。